

南ゴビ・ハンホンゴル村の明日

浦野 裕司

二年前にモンゴル屈指の鉱山都市、エルデネット近郊のヒヤラガンド村でホームステイした。

次の旅の目的地は、私の第二の故郷、ハンホンゴル村。私にとって四年ぶり、五度目の訪問となる。四年前のハンホンゴル村は、鉱山開発や観光の波など押し寄せず、昔ながらの遊牧生活を送る人々の多いモンゴルらしさあふれる地域だった。しかし、そのハンホンゴル村にも新たな波が忍び寄っていた。

今回の旅は、学生時代からの友人や、かねてよりモンゴルへ行きたいと言っていた若いメンバーたちとツアーを組んだ。友人とは、大学の同級生、イクとその夫であるリュウウさん、それに、これまでの二回の旅ですつかりモンゴルに惚れ込んでしまったアッキーの三人。若手メンバーは、マサル、ミキ、マリ、ヨリの四人だ（すべて仮名）。それに、いつもガイドをお願いしているモンゴル人青年シャガイ君と私、総勢九人のグループ旅行である。

メンバーは皆、個性豊かで気の置けない仲間たち。楽しい旅になること請け合いと期待を膨らませての旅になった。ガイドのシャガイ君は、私がつとも信頼するモンゴル人の一人だ。日本人の心を理解し、常にきめ細やかな対応をしてくれるツアーガイドである。かつて日本に留学し、新聞配達をしながら大学院で経営学を学んだ彼は、モンゴルに帰国後、旅行社を起した。困難の多い南ゴビ訪問を、いつもサポートしてくれる貴重な存在である。今は社長という立場にありながら、この旅も私たちの草の根交流を支えるために同行してくれた。

旅立ちからのハプニング

いくら事前に準備していても、モンゴル旅行は毎回ハプニングの連続だ。ハプニングは旅の醍醐味ではあるのだけれど、今回は出発前の成田で早くも問題が起きてしまった。

搭乗ロビーで搭乗開始の案内を待っていると、放送でマリの名前が流れた。搭乗口へすぐに来るようにと言っている。

マリはなかなか搭乗口に現れない。探し回った末、免税店の近くにいたマリを見つけ「放送で呼ばれているよ」と伝えると、不安そうに搭乗カウンターへ向かった。彼女はそのまま係員に連れていかれて、しばらく帰ってこなかった。かつてウランバートルの空港で呼び出しをくらい、帰国する便に乗れなくなるのではないかと肝を冷やした経験のある私は、ちよつと心配になった。

しかし、しばらくすると何事もなかったような顔でマリが帰ってきた。スーツケースに入れた懐中電灯のバッテリーが、機内に積み込みではいけないタイプだったのだそうだ。そう危険なものではないらしく、手荷物として持ち込むよう指示されたとのこと。さらりとそんな説明をして澄ました顔をしている。二十代のうら若き女性ながら、彼女は結構図太い。

少々口の悪いマサルは、今にも「迷惑なものを持ってくるんじゃないよ」と言いそうだったが、黙っていてくれてほつとした。旅の始まりから気まずい雰囲気になるのは願わくば下げだ。

モンゴルの諺を思い出した。「逃げた馬は連れ戻せるが、口から出た言葉は二度と連れ戻せない」口は災いのもと、沈黙は金なり、である。これまで私は、何度連れ戻せない言葉を発してしまったことだろう。

M I A Tモンゴル航空のエアバスは、成田空港を定刻に離陸。四時間五十分後にウランバートルのチンギスハン空港に着陸した。しかし、今度は私が入国時の手荷物検査でひっかかってしまった。訪問する学校へのお土産の箱入りチョコレートが、X線検査で特殊なバッテリーと勘違いされたようだ。それほど怪しげな人相ではないと自分では思っているのだが、どういいうわけか私はモンゴルの入出国で

荷物を確かめられることが多い。手荷物を開ける習慣がすっかり身につけてしまっている私は、手早くチョコレートの箱を取り出して中身を見せ

「チョコレート、チョコレート、プレゼント・フォー・スクール」

と怪しい英語を大声で連呼した。係員はさもうるさそうに

「行け」と言った。

「日本のチョコレートはホタテ貝の殻で出来てるんだぞ。まわりはコーティングしてあって指にやさしいし、蛍光色だつてあつて世界一の品質なんだぞ」

モンゴル語でそう言つてやりたかったが、どう言つたら良いか分からなかったのが心残りだ。

停電と泣き虫

モンゴルでは、ウランバートルのような都会でもよく停電が起きる。東日本大震災以来、少しは停電にも慣れていたは

ずだが、油断していると驚かされることがある。

一泊目はウランバートルのホテルに泊まり、まだ明けやらぬ翌早朝。朝一番の南ゴビ行きの飛行機に乗るため、出発の準備をしている時に停電が起きた。私は、同室のマサルとエレベーターホールに向かっているときだった。幸いエレベーターに乗り込む前だったので事なきを得たが、現地へのお土産がたくさん詰まった重いスーツケースを持って五階から下まで降りる羽目になった。若い女性たちの部屋では、ちよっとしたパニックになったようだ。電燈が消えたホテルの部屋は窓からの薄明りだけになり、心細くなったミキが

「帰りたい」

と泣き出したのだそうだ。この事件でミキは、旅の間中、そして帰国後も泣き虫扱いされ、ことあるごとに

「泣いてないかい？」

とみんなからいじわるな言葉をかけられ

続けることになる。

備えあれば憂いなし

コンビニなど、どこを見回しても見当たらないゴビ地方を旅するときには、十分な備えが必要だ。出発前にここ一週間の現地の気温を調べたところ、朝晩は摂氏十度を下回った日もあるらしい。ゴビと聞くと、灼熱の砂漠のようにイメージする人が大半だろう。しかし、ゴビ地方は寒暖の差が大きい。真夏の炎天下では摂氏四十度近くになることがあっても、ひとたび雨が降れば急激に気温が下がり、零度近くになることさえある。だから念のため参加メンバーには「暖かい服を用意するように」とメールしておいた。

それなのに、である。南ゴビ県の県庁所在地、ダランザドガドの空港に着いたとたん、マサルが

「服を買いたい」

と言いつ出した。

「寒そうだから暖かい服を持ってくるよ

うにって、メールしたじゃないか」

と私が言う

「まさかこんなに気温が低いとは思わなかった」

と申し訳なきように言う。

食料品を買ひ込むために立ち寄った市場で、マサルは衣料品の店を探してパーカーを買った。パーカーを選んでるマサルの背には、八人の冷たい視線が刺さっていた。

モンゴルの旅では、第一に心に留めおくべき諺が「備えあれば憂いなし」である。

夜の用足しには懐中電灯（かつて、深夜に用足しに出かけて、翌朝までゲルに戻れなかった人がいた）。お腹をこわした時のためを考えて、おかゆのレトルトパックのような消化の良い非常食やスポーツ飲料（着いて早々に腹を下して、帰国するまでひどい下痢に悩まされた人がいた）。そして、寒さ対策の暖かい服である（マサル！）。

メンバーの中で唯一、憂いの無い備えをしていたのは、山男のアッキーだった。防寒のためのアルミ蒸着シート、お湯で戻せるインスタントラーメンに各種レトルトパック、山用のヘッドランプにコンパス、はたまた柿の種まで、非常時の備えとビールのつまみを、彼は忘れた試しがない。旅行中、アッキーの備えにメンバーの多くが助けられた。

風船祭

いつもお世話をしてくれるハンホンゴル芸術専門学校のボルト校長は、この年も私たちのためにゲルを二張用意してくれた。ゲルの中には、夏休み中の学校の寄宿舎から運んだベッドが並んでいる。

ところどころバネが伸びているベッドはあまり快適ではないが、ボルト校長が車で何度も往復して人数分のベッドを運んでくれた様子を想像するとありがたいことこの上ない。少々の寝心地の悪さなどがまんしなれば罰があたる。

ゲルはおそらく、ツーリストキャンプで使っていたものの払い下げ品だろう。かなりの年数が経っているようだ。入口の木製の扉は立て付けが悪く、開け閉めにちよっとしたコツが必要だ。そのゲルが、初日からちよっとしたトラブルを起こしてくれた。

ゲルで昼食を取った午後のことだ。雲行きが怪しくなり、あつという間に大粒の雨が降ってきた。

夏の南ゴビの雨は、遊牧民にとって恵みの雨である。ひと雨降れば、暑い日差しに晒されて元気をなくしていた草が息を吹き返す。茶色がかっていた草原はすぐに緑を取り戻し、山羊も羊も馬もラクダも皆ご馳走にありつける。だから遊牧民たちは、雨が降るときまって「ポロー、ポロー（雨だ、雨だ）」と嬉しそうに空を見上げる。

しかし私たち日本人客にとっては、困った雨となった。男性のゲルではみな昼食後の昼寝を食っていた頃、女性たち

のゲルで大騒ぎが始まった。何が起きたのかと隣のゲルの外から声をかけると

「雨漏りがしたいへん！」

とイクの声。中を覗いてみると、濡れないようにと、四人が必死で雨漏りしていない場所にベッドや荷物を移動させていた。それでも、なんだか楽しげな様子は、修学旅行の女学生グループみたいだ。

ゲルの天井には、おかしなものが……。あちこちにレジ袋が下がっているのだ。

不思議に思っていたら、それで落ちてくる水滴をキャッチしているのだという。レジ袋で雨漏り対策なんて、初めて見る光景だった。膨らんだレジ袋がたくさん下がるゲルの中で、ワイワイ楽しげにベッドや荷物を運んでいる。だが「風船祭りだねえ」と言ったが、この騒ぎにぴったりの表現だと思った。

ウランバートルのホテルの停電で「泣き虫」のレッテルが貼られたミキだが、風船祭りでは大活躍。背の高いミキは、同じく背の高いイクと二人で手際よくゲ

ルの天井に袋を縛り付けていた。

朝飯前のお手伝い

モンゴルの遊牧民のたくましさにはいつも感心させられるが、今回の旅で出会ったトクソーという幼児の行動には、これまでにない感動を覚えた。トクソーは、滞在中、食事の世話をしてくれたモンゴル人夫婦の子ともだ。髪を肩まで伸ばし、ときおり愛くるしい表情を見せるトクソーのことは、はじめだれもが女の子だと思い込んでいた。だが、実は男の子だったのだ。トクソーはまだ三歳。モンゴルの習慣で、四歳になるまで髪は切らないのだそうだ。男の子だという認識で改めて顔を見ると、なるほどチンギスハンの末裔にふさわしい鋭い目つきをしているのではないか。そのトクソーが、「幼くても立派なモンゴルの男だ」という姿を見せてくれた。

キャンプ生活三日目の朝食前、ゲルの前で朝日に輝く草原をのんびり眺めてい

たら、視界にトクソーの姿が入ってきた。

白い液体の入ったペットボトルを、両手に一本ずつ重たそうに下げて、数百メートルも離れたところのゲルへ向かって歩いていった。中身はどうやら馬乳酒らしい隣のゲルにお裾分けするよう母親に命じられたのだろう。馬乳酒の入った、おそらくニリットルは入るであろうペットボトルを両手に持って歩くなど、三歳の子どもにとってはたいへんなことである。五、六歩行くとペットボトルを地面に置き、ひと休みしてまた歩き出す。そのくり返しが続き中間地点に差しかかった頃になって、一本を脇に抱えることを思いついたようだ。もう一本は両手で持つ。歩き出すと、今度は今までの数倍、十四五歩も進めるようになった。それでも二百メートルほど先にあるゲルに着くまで、十分近くかかっただろうか。トクソーにしてみれば、たいへんなお使いだったはずだ。

お使いを命じた母親の方を一度も振り

返ることなく、重い馬乳酒を運ぶトクソー。その姿に感動したのはもちろんだが、「立派なモンゴルの男」と私を感じたのはお使いを終えた帰り道だった。「こんなことは朝飯前だ」と言わんばかりに胸を張り、意気揚々とこちらに向かってくるのだ。日本の三歳児には絶対にありえない、たくましい姿である。私の隣で一緒にその様子を見ていたマリも、いたく感動していたようである。私たちの前を通り過ぎるとき、笑顔でも見せてくれるだろうと期待したが、見事に裏切られた。こちらに向かつて媚を売るようなことなど一切せず、トクソーはまことに堂々と前だけを見て歩き、母親のもとへ帰っていった。

砂丘に遊ぶ

私たちのキャンプ地から北西へ車で二時間ほどの所に、砂丘地帯がある。この日の私たちの目的地は、南ゴビの観光ツアーでは必ず連れていかれるモルツウク

砂丘近くの、名もない砂丘群。観光客などだれも訪れることのない自然そのままの砂丘が連なっている。モルツウク砂丘の方はといえば、砂丘の下に車が着くなり、お土産屋のラクダが近づいて来る。気がつけばあつという間にラクダの背に積んであったお土産の品が広げられ、スーパーニア・ショップの開店である。手招きする店主を逃れて砂丘に登れば、足跡だらけの砂丘に幻滅する。モルツウク砂丘は、そんな観光名所である。

私たちが訪れた砂丘には足跡ひとつなく、ゴビの風に掃き清められたまっさらな姿を目にすることができた。その砂丘に見とれる間もなく、だれもが子どものように無邪気に登り始める。前日の雨で少し湿った砂は、あまり崩れることなく登りやすかった。三階建てのビルほどの高さの砂丘のつべんに登ると、周囲の景色が見渡せる。ぐるり三百六十度の地平線。右に左に盛り上がった砂丘。まずはお互いに記念写真を撮り合っていたが、

そのうちみんな「お砂遊び」に熱中し始めた。砂を前にすると、だれもが穴を掘ったり山を作ったりトンネルを掘ったりしたくなる。砂に触れる感触は、凝り固まった心を優しくもみほぐしてくれる。幼稚園の庭に砂場を作ることを初めて思いついた人は偉大だと思つた。

世界各地を巡り秘境慣れしているイクとリュウさん夫婦は、いつのまにか面白いことを始めていた。広い砂丘の斜面を、縦・横・斜めと上ったり下ったりしているのだ。始めはわけがわからなかったが、だんだんその足跡が文字になっていった。なんと足跡で自分たちのイニシヤルを書いているのだ。ゆつくりと刻まれていく巨大な足跡のイニシヤルを見ていたら、

彼女たち夫婦の刻んできた人生を見ているような不思議な気持ちになった。そして柄にもなく「これからの二人の人生に幸多かれ」などと祈っていた。

大自然そのもの、その中で育まれる命、そしてそこで暮らす人々の営みは、別世

界の住人の心を変える力を持っているのだろう。草が疎らに生える南ゴビの大地、その大地で生まれた風が作り上げた砂丘、はたまた痩せて乾いた大地で育つ羊の毛で作られたゲル。そういったものに囲まれて感じるものは、いきおい日本にいる時のものとはかなり違ってくる。世界各地の観光名所の美しい風景とは一線を画した、厳しい南ゴビの自然。訪れる人を突き放すようでいて、優しく包み込んでくれる南ゴビの大地やそこで暮らす人々。彼の地に惹かれるのは、なんら飾るところのない、ありのままの厳しさと優しさとが混ざり合っている場所だからなのだろう。

乗馬体験・その1 マサルの変身

今回の旅では事前に馬の手配ができず、楽しみにしていた乗馬遠足は無理とあきらめていた。しかし「近所」のゲルの遊牧民が気を遣ってくれて、遊牧の仕事が一段落した夕刻、一頭の馬を連れて来

てくれた。交替で馬に乗せてくれるというのだ。砂丘から帰り、乗馬をあきらめて昼寝をしていた私たちだが、これはうれしかった。体調を崩して、砂丘への行き帰りの車中もゲルキャンブに帰ってからも、ずっと寝ていたマサルだが、彼は大の乗馬好き。「乗馬」という言葉を聞いた途端、跳ね起きた。それまでの体調の悪さが嘘のように元気になり、馬に向かって走って行く。スーパーマンの映画のワンシーンを見ているような、すばらしい変身ぶりだった。

マサルを除けば、初めて馬に乗るメンバーが多かったにもかかわらず、みんな楽しそうに馬に乗る。胸を反らしてベテランの馬乗りのように進むリュウさん。夫の雄姿を写真に収めてから、今度は自転車にでも乗るように気軽に馬上の人となるイク。この地であつて落馬した経験のあるアッキーも、今回は乗馬を楽しめたようだ。ミキやマリは初めての乗馬体験だったが、背筋を伸ばして、若さあふ

れる美しい乗馬姿を見せてくれた。

マサルはといえば、私たちの周りを何も周もした上、遠くまで馬を走らせて行ってしまった。実はマサル、乗馬競技で優勝するほどの馬乗りなのだ。一週間の仕事の疲れは、休日の乗馬とラーメンで癒す彼の体に、広い草原での乗馬は最高の薬に違いない。あとは美味いラーメンがあれば無敵のマサルだが、残念ながらハンホンゴル村にラーメン屋は一軒も無い。そんなことはともかく、乗馬でいつも感じることもある。乗馬した後は、だれもが穏やかな表情になるのだ。アニマルセラピーという言葉を持ち出すまでもなく、動物、とりわけ馬には人の心を癒す力が確かにあるのだろう。

そうそう、ヨリのことを忘れていた。みんなが代わる代わる乗馬を楽しんでいる間、ヨリはゲルでぐっすり眠っていた。乗馬が終わり大草原を真っ赤な夕焼けが包む頃、目をこすりながらゲルから出てきたヨリは、すっかり元気を取り戻していた。

ていた。

乗馬体験・その2 足軽気分
翌日は、南ゴビいちばんの名所、ゴルバンサイハン国立公園のヨリンアム(鷲の谷)へ向かった。標高二千メートル地点にある駐車場には、観光客相手の馬がたくさん待っている。今回の旅は乗馬の機会が少ないので、谷の奥までの片道三キロメートルほどの道を、その馬で往復しようということになった。
私はみんなの乗馬姿をカメラに収めてあげようと、馬に乗らず徒歩で行くことにした。山男でありマラソンランナーでもあるアッキーも、歩いて行くという。

6)>

馬はのんびり並足で行くが、人間とは足の長さが違う。馬の並足は人の速足ぐらいの速度だ。写真を撮るため私は時々立ち止まるので、いきおい走って追いかけることになる。運動不足の私は少し走ると息が切れたが、この時は「帰りは馬で帰ってくればいいさ」とのんきに考え

渓谷が狭まりこれ以上は馬では進めないとこの場所に到着。そこからは全員徒歩で、さらに奥へと進む。岩肌が迫りイワツバメが飛び交う狭い谷は、いつ訪れてもなかなかの景観である。ゆっくりその景色を楽しみ、さて馬で帰ろうかというとき、困った事態が起きた。馬は、往路で乗った人の数しか用意できないというのだ。みんな気の毒がってくれたが、「帰りは私が歩くから」などと言って代わってくれる者は一人としない。仕方なく私とアッキーは帰路も歩くことになった。

モンゴルで馬に乗るとたいいて、行きは並足、帰り速足になる。できるだけ遠くへ行かず、帰りは早く戻って休めるようにしようという馬なりの知恵が働くのだろう。おかげで帰路は完全にジョギング状態になってしまった。マラソンランナーのアッキーはすばらしいシチュエーションの中で走れるのを喜んでいたが、

いた。気がつけば、みんなと並んで夕日を眺めている。周囲を和ませてくれるような、いつものほんわかした表情に戻ったヨリの顔を見てほっとした。

メンバー全員がようやくそろい、壮大な夕焼けを心ゆくまで堪能した。遮るものなど何もない広い空が、オレンジ色から茜色へのグラデーション模様染まってく。夕焼け空を背景に、二頭の馬のシルエットが浮かび上がる。少しづつ濃さを増していく夕焼けに、心の中の不純物がすっかり洗い流されていくような気がしたのは、私だけではなかったはずである。

その晩は天体ショーも鑑賞できた。夜が更けるにしたがつて存在感を増す天の川。その天の川をいくつもの流れ星が横切る。見かけによらずロマンチストで、乗馬やラーメンと同じくらい星が好きなマサルは、昼間体調が悪かったことも寒さも忘れてゲルの外で遅くまでしゃべっていた。

私にはきつい高地トレーニングになった。

途中、馬上で揺れるリュックサックを持って余っていたマリに気づき、それを預かることにした。預かった方がいいが、背には自分のリュック、前にはマリのリュック、さらに重たい一眼レフカメラを肩にかけて馬の傍らを走る。その姿は、戦国武将の具足を持って戦に向かう足軽か、高貴な姫君のお供をする家人のように見えたのではないだろうか。日本ではまずできない体験だろうなあと考え直し、足軽気分、家人気分を味わいながら駐車場までの帰路を急いだ。

村長とその妻

今回の旅で久しぶりに会ったハンホンゴルの人々に中に、サインポインさんがいる。ハンホンゴル村の現村長である。村役場へ挨拶に行ったら、威厳に満ちた態度で私たちを迎えてくれた。

彼はかつてハンホンゴル村の郵便局長。その後、職を失ってからしばらく酒に溺

れる日が続き、ハンホンゴル芸術専門学校の給食調理員である妻、トヤさんが家族を養っていた。トヤさんは四年前の旅で私たちの食事を世話してくれたのだが、当時ひどい頭痛に悩まされていて検査した結果、手術が必要と診断されていた。私たちのお世話が済んだら町の病院に入院して手術すると話していた。そんな時に無理を言ってお世話を頼んだのが悔やまれた。

それから四年、家族にどのような時間が流れたのだろうか。おそらくは、妻の病気に一念発起した夫サインボインさんは酒を断ってまじめに働き、郵便局長を務めていた頃の信望を取り戻したのだろう。

ウランバートルへ戻る前の日の夕刻、サインボインさんがトヤさんを連れてキャンプ地にやってきた。トヤさんの胸で、かわいい赤ちゃんがにこにこ笑っている。母子を見るサインボインさんも満面の笑顔だ。トヤさん一家の幸せそうな様子を

見て、幸せのおすそ分けをいただいたような気がした。

さらに嬉しかったのは、四年前、母親のトヤさんを手伝っていた長女のアリョウナが、今はウランバートルの大学の医学部で医師を目指して勉強中だということだ。どうやら、母親の大病を機に医学を志すようになったらしい。夏休みで帰省中のアリョウナは、医学生として自信に満ち溢れた表情だった。はにかみや、ろくに挨拶もできなかった彼女もまた、父親と同様、大変身である。

妻の病気は夫を立派に立ち直らせ、娘の輝かしい進路まで導いてくれた。別れのトヤさんの満足気な笑顔は、サインボイン一家の幸せそのものを表していた。

ダンスとホーミー

ハンホンゴル村での滞在、最終日の夜。毎回恒例の、ハンホンゴル芸術専門学校教職員とのパーティーが催された。まずは、私たちからのプレゼントであるチョコ

ークと絵画用品を渡す簡単な儀式。そして卒業生による馬頭琴演奏や在校生のダンスと続き、恒例のダンスパーティーとなる。今回は若い客人が多いと、教職員の皆さんは大喜びである。

私はダンスが苦手で、なるべくダンスをしないで済むようにとカメラを構えてごまかしている。そのカメラのファインダーの隅に、中年の男性教師に連れ出されるミキの姿が写った。どうしたことかと気になったが、なかなか帰って来ない心配になり様子を見に行くと、驚いたことに、ミキは廊下でダンスの特訓を受けていた。教える男性教師は、よい生徒を得たと本気になって指導していた。ミキはといえば…。少し汗をかいていたようだが涙は流していなかった。

パーティーでは、私たちの出し物も要求される。今回は、メンバー全員で日本の歌を歌ったあとに、とっておきの出し物を用意していた。リュウさんのホーミーだ。ホーミーとは、二つの異なる声を

一人で同時に響かせるモンゴルの唱法で、独特の響きが美しい。

モンゴル行きが決まって打ち合わせをした際に、イクが

「夫がホーミーを練習している」と言った。それを聞いた私は、リュウさんにはぜひ、現地で披露していただくのと勝手に決めていた。そこで合唱のあと「もう一つ出し物があります。ホーミーをお聴き下さい。リュウさん、お願いします」

と私がアナウンスした。リュウさんは突然の指名に困っていたが、それでも自慢ののどを披露してくれた。リュウさんの喉からホーミーらしき響きが聞こえてきたので、モンゴル人たちはどう感じているかと様子をうかがった。

なかなかやるじゃないかと拍手する人がある一方で、笑っている人、困ったような顔の人などさまざまだった。特に困った表情が露わだったのが、モンゴル伝統音楽担当の若手教師だった。フォル

6)>

クローレのバンドを組んで活躍しているリュウさんは、面子にかけてもいつかきつと彼をホーミーでうならせさせてくれることだろう。

健康管理

モンゴル旅行では、必ずと言ってよいほど、メンバーの多くが何らかの体調不良を訴える。まったく日本にいたときと同じ、いやそれ以上に健康そのものだったのはイクである。旅慣れているからなのか、生来のたくましさからなのか、とにかくモンゴル人女性のごとく凶太かつ山男だけあってまったく問題なし。

一方、マリは胃の調子が悪くなり、リュウさんは腸に異変が。さて、泣き虫ミキはというと、こちらは旅の間ずっと体調だった。ミキの仕事は人の体調を管理すること。普段あまりたくましさを感じさせない泣き虫ミキだが、さすがである。ミキをさんざん泣き虫扱いしてからかつ

ていたマサルなどは、せっかくの砂丘ツアーでも、青い顔をしてほとんど車の中で寝ていたし、それに倣うかのようになり、ヨリも熱を出してダウンジャケットに包まり長時間にわたって車で寝ていた。まあ、ヨリは体調がよくても暇さえあれば寝ているのであるが…。

モンゴルの旅に慣れているはず私も、実はだんだん胃腸の様子がおかしくなっていた。山羊肉と乳製品中心の食事ばかり続けると、さすがに胃腸が新鮮な海の幸や野菜の入った味噌汁を求めるのである。

無謀な旅をする日本人青年たち

南ゴビを去る日、ダランザドガドの空港待合室にいたら、ウランバートルから着いたばかりの二人の日本人青年に話しかけられた。驚くことに「レンタカーはどうやって借りたらいいですか」と尋ねるのだ。南ゴビの小さな空港で、

レンタカーなど無理な注文である。なにしろこの空港には、タクシーすら待つていないのだ。もちろんバス便も皆無。「こんな田舎で、レンタカーを借りるなんて無理だよ」と答える。

「じゃあ、タクシーは」と聞く。

質問に答える気にもなれず

「何の当てもなく、ここまで来たの」と尋ね返した。

「レンタカーぐらいはあると思ってました。とりあえずこれから、予約していたツーリストキャンプへ行きたいのだけれど、どうしたらいいんでしょう」

「そんなこと、私に聞くなよ。レンタカーは無理でも、レンタホースかレンタキヤメルならなんとかなるかもしれないよ。モンゴル人のだれかに頼んで、馬でもラクダでも、好きな乗り物を借りて行きなさい」

とても言うて突き放したくなったが

「あつ、そうだ。さっき私が話していたモンゴル人夫婦は、留学先の日本から一時帰国して家族と過ごしてまた日本へ帰るそうだから、近くに家族がいるはずだ。紹介してあげるよ」

と口にしていて。なんて親切な日本人なのだろう。

彼らは、そのモンゴル人夫婦の家族の車で、ダランザドガドの市街地まで送ってもらえることになった。どうやらそこでタクシーを拾ってくれるらしい。とりあえず、一件落着である。田舎のモンゴル人はやさしい。

その後、青年たちはどのような旅をしたのだろうか。無事に帰国できたのだろうか。これからの二人の人生のためには、少し無事ではない旅を経験してもらいたいと思った。

ハンホンゴル村の明日

キャンプ地に滞在中、ずっと気になっていたものがある。暗くなると、灯りの

点いたタワーらしきものが数キロ先に浮かび上がるのだ。「妙なものがあるなあ」と思っていたが、ポルト校長に聞くと、石炭採掘のためのボーリング調査をしているらしい。

モンゴル各地で、地下資源の採掘ラッシュに沸いている。ハンホンゴル村にもついにその波が押し寄せ、石炭の鉱脈があることが分かったとのこと。近い将来、ハンホンゴル村で石炭採掘がはじまり、村は大きな変貌を遂げることだろう。村の若者に話を聞くと、炭鉱によって村が発展するはうれしいと言う。

氷点下三十度にもなる冬。砂嵐で外にも出られないような日の多い春。日照りが続けば、大地も人も家畜も乾ききってしまう夏。遊牧民たちがいちばんよい季節と言う秋は、一か月足らずで足早に通り過ぎてしまう。遊牧以外の仕事は少なく、娯楽もほとんどない。そんな南ゴビである。だれもが、もっと豊かになりたいと願うのは当たり前のことだ。私のよ

うな日本人が、第二の故郷などと思いつつまでも変わらない遊牧生活が続いてほしいなどと願うのは、身勝手なことなのに違いない。それでも、環境破壊などお構いなしにどんどん石炭を掘り、大型ダンプカーが膝々と砂塵を巻き上げて行き交う村にはなつてほしくないというのが正直な気持ちである。

思い出すのは、六年前に聞いた若い遊牧民の話だ。彼は

「遊牧生活には自由がある。とりわけお金に縛られない自由は何物にも代えがたい」

と何のためらいもなく語ってくれた。しかし、炭鉱での採掘が始まれば、村人の多くがそこで働くようになるのは予想に難くない。遊牧生活に見切りをつけ、現金収入を求めて炭鉱で働く人々は少ないことだろう。

豊かな暮らしにどっぷり浸かっている日本人の私などは、「豊かさ引き換えに失うものがあるのではないか」といら

ぬ心配をしてしまう。しかし、失うものと得るものを比べたときに、得るものの方が少ないと簡単に言い切れるものではない。ハンホンゴル村では、小・中・高合わせて五百人規模の学校にすら校舎内にトイレも水道もないのだ。

今はただ、良いものは良いまま、ずっと変わらずにいてほしいと願わずにはいられない。ハンホンゴル村は、そして村人たちは、どのように変貌していくのだろうか。変わるものと変わらないものを確かめに、また彼の地を訪れなければならないと思う。

〈付記〉

帰国後、ミキ・マリ・ヨリの三人娘の秘境への憧れの気持ちが高まった。冬休みに入ると、三人して雪深い秘湯へと旅立って行った。目的地は山奥の電気も通じていないランプの宿である。マリは相変わらず凶太く、雪の露天風呂を満喫したらしい。ヨリはまた体調を崩して、行

きの列車ではずっと寝ていたようだ。

旅立つ三人に、私は登山用のヘッドランプを持たせた。ほんのジョークのつもりだったが、そのランプが実際に役に立ったという。丹前姿にヘッドランプを着用している怪しげな写真が、メールで送られてきた。

ミキはこの旅で、一度も泣くことはなかったそうである。

— つづく —